

日米帝国の総力戦

International Online Symposium

・マイノリティ動員 ・レイシズムを相比する

Takashi Fujitani, *Race for Empire*

日時：8月29日(土) 開始 9:00 (終了予定 11:30)

ZOOMによるオンライン国際シンポジウム

『共振する帝国—日系人米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士』(岩波書店、2020年) 刊行にあたって

コメンテーター：

増淵あさ子 (同志社大学)：冷戦史・沖縄占領研究

中野敏男 (東京外国語大学名誉教授)：歴史社会学・思想史

李孝徳 (東京外国語大学)：ポストコロニアル研究

司会：

水谷智 (同志社大学)：間-帝国史研究

ディスカッサント：

酒井直樹 (コーネル大学)

米山リサ (トロント大学)

板垣竜太 (同志社大学)

中村理香 (成城大学)

北原恵 (大阪大学)

レスポンス：

タカシ・フジタニ (トロント大学)：歴史学

使用言語：日本語

事前申し込み制 (定員30名になり次第締め切り)

申し込み先：online_ifa@tufs.ac.jp

Takashi Fujitani, *Race for Empire*, University of California Press, 2011 によれば、アジア太平洋戦争が総力戦と化すにつれ、日米双方の帝国において朝鮮人および日系人というそれまで徹底的に周縁化されていたコロニアル/エスニックなマイノリティが兵力として動員されていく過程で、従来の排他的なレイシズムは包摂的なレイシズムへと変化し、下品で(vulgar) 暴力的なレイシズムは表向き人間性に配慮した上品な(polite) レイシズムへとその様態を変えることになったという。日本と米国というその成立も発展過程もまるで異なる二つの帝国国家がアジアにおける覇権争いに鎗を削るなか、互いが互いの社会を人種差別的であると非難し合いながら、双方の国家が共振し(resonance)、マイノリティに対する排除と包摂の様態に奇妙な相似化(convergence) が起こり、しかも日本の敗戦後、東西冷戦下の日米関係は、戦後の米国における”モデル・マイノリティ”という日系アメリカ人の包摂の形態をそのまま反映する形になってしまったというのである。戦時期の映画や小説はこれらの帝国主義イデオロギーを反映しつつ、強化する反面、逸脱していることも本書では緻密に分析されている。果たしてこうした共振や相似化はどのようにとらえられるべきなのか。こうした二帝国の共振や相似化の分析は現代世界になお影響を与え続けている帝国主義/植民地主義を批判的に再分節するために何を提供するのだろうか。本シンポジウムでは、本年 *Race for Empire* の日本語版『共振する帝国—日系人米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士』(岩波書店、2020年)(仮題) が刊行されるにあたり、多領域の研究者たちが集い、こうした共振と相似化の検証を通じて議論し、帝国主義研究/植民地主義研究を批判的に豊饒化することを目指したい。

連絡先

東京外国語大学・海外事情研究所

online_ifa@tufs.ac.jp

http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/

共催

科研「批判的地域主義に向けた地域研究のダイアレクティブ」

科研「記憶論的転回以後の集会的記憶論の学際的再検討」

同志社大学・人文科学研究so・第8研究「現代レイシズムの批判的比較分析—植民地研究との融合を目指して」

東京外国語大学・海外事情研究所

同志社大学・コリア研究センター